

## ほめる教育



外山滋比古

教育者はいつも何かに対して、うっすらとした不満をもっているのかもしれない。たいてい雲がかかっている。青空のように晴々した心をもっていることはすくない。

人の欠点は目ざとく見つける。そういう頭はいい。ところが、すぐれたところを発見することが下手である。どこか心が冷いからではなかるうか。

教育は叱ることではない。ほめてこそ教育である、といったことすら知らない人が先生でござい、とやっているのだから、おかしい。教育があまりに些末な技術ばかりに頭をつこんだため、肝心なことが見えなくなってしまったのであるうか。

校内暴力などがおこると、先生たちは教科を放ったらかして生徒指導に目の色を変える。心の冷い人たちがあれこれ議

論して名案の浮ぶはずはないのである。

幼稚園には園内暴力がないからと安心していると、後年、あばれ回るような生徒ができてしまうおそれがある。幼児教育が重要であるというのなら、十年先、十五年先におこる問題に対しても責任を感じなくてはなるまい。

こどもはほめなければ伸びない。叱ってばかりではいけない。母親によくそういう話をするけれども、母親はなっていない、と思っていることが多い。このごろ、そういう自分気付いて、愕然とした。母親もほめてやらねば、こどもをほめることのできる自信もったお母さんになるわけがない。そんなことを考えているときに、医師向けの雑誌で、小児科のお医者さんが反省をこめて書いている文章を読み、共感した。

ある大病院の副院長をしているその小児科医は、こんな風に言うのである。

「母親が育児に自信を失った原因の一端は私たち小児科医にもあるのではないでしようか」

幼稚園でも似たようなことはあるかもしれないが、こういう率直なことははめつたに聞かれない。

「小児科医は口を開くと、今のおかあさんは育児が下手になったと欠点ばかり攻撃し、母原病という新しい言葉もできたほです」

教育者も先生、お医者さんも先生。どこも先生はよく似ているらしい。

「私たちは子どもをしつけるのに、『おかあさん、しかつてはいけません。むしろ、おだてなさい』といつておきながら、母親に対してはほとんどほめずに、その欠点をたたいてばかりいるのが現状であり、これでは小児科医が母親の自信喪失に拍車をかけているといつてもよいと思ひます」

われわれにも耳の痛いことばである。

「発育の悪い子どもでも、おかあさん、ここがこの前よりよくなつていますよとほめた場合、必ずといつてよいほど、次

に相談に来たとき子どもはよくなつています」(阪正和氏「叱るよりほめよ」SCOPPE一九八一年六月号)

こちらも大いに教えられた。その後、中学校の同窓会で開業している小児科の医者に久しぶりで会つたから、このほなしをもち出した。

その友人の言うには、大きな病院に勤めている医者はうらやましい。われわれのような開業医は、母親からさんさんためつけられて寿命を縮める。夜中に電話がかかってくる。何ごとかと思うと、

「オシメでカブレたらしいんです。どうしたらいいんでしようか」

などときいてくる。教えても、お礼にくるのはすくない。起こされた医者は寝そびれる。ついウイスキーを睡眠薬代りにする。それでもストレスがたまって苦しんでいる。

「そういう母親をほめるのは人間業ではないね」

友人はそういつた。現実はずきびしいが、それでも、やはり、教育はほめなくてはいいけない。

(お茶の水女子大学)